

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

蒔かれた種

――マルコ伝第4章1～20節――

1964年7月26日

小池辰雄

譬・譬話・例話 見るけれども認めず 劇的な事態 運命劇と性格劇 相対的な場 突き破って進んでいく 御言を受け入れる 十字架の砕けと天来の肥料 一切の秘訣を得たり 去此不遠 神相

【マルコ4:1～20】（私訳）

1 イエスはまたも、海で教えはじめられた。おびただしい群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわったまま、海上におられ、群衆はみな海に沿って陸地にいた。2 イエスは譬で多くの事を教えられたが、その教の中で彼らにこう言われた、3 「聞きなさい、種まきが種をまきに出て行った。4 まいているうちに、道ばたに落ちた種があった。すると、鳥がきて食べてしまった。5 ほかの種は土の薄い石地に落ちた。そこは土が深くないので、すぐ芽を出したが、6 日が上ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7 ほかの種はいばらの中に落ちた。すると、いばらが伸びて、ふさいでしまったので、実を結ばなかった。8 ほかの種は良い地に落ちた。そしてはえて、育って、ますます実を結び、三十倍、六十倍、百倍にもなった。9 そして言われた、「聞く耳のある者は聞くがよい」。

10 イエスがひとりになられた時、そばにいた者たちが、十二弟子と共に、これらの譬について尋ねた。11 そこでイエスは言われた、「あなたがたには神の国の奥義が授けられているが、ほかの者たちには、すべてが譬で語られる。12 それは『彼らは見るには見るが、認めず、聞くには聞くが、悟らず、悔い改めてゆるされることがない』ためである。13 また彼らに言われた、「あなたがたはこの譬がわからないのか。それでは、どうしてすべての譬がわかるだろうか。14 種まきは御言をまくのである。15 道ばたに御言がまかれたとは、こういう人たちのことである。すなわち、御言を聞くと、すぐにサタンがきて、彼らの中にまかれた御言を奪って行くのである。16 同じように、石地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くと、すぐに喜んで受けるが、17 自分の中に根がないので、しばらく続くだけである。そのうち、



御言のために困難や迫害が起つてくると、すぐつまずいてしまう。¹⁸また、いばらの中にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くが、¹⁹世の心づかいと、富の惑わしと、その他いろいろな欲とが入ってきて、御言をふさぐので、実を結ばなくなる。²⁰また、良い地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞いて受けいれ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶのである」。

● 譬・譬話・例話

マルコ伝というのは、^{たとえ}譬話がそうたくさんあるわけではない。マタイ伝13章が譬話の集団みたいなところですが、マタイ伝13章1節から9節と、今のマルコ伝4章1節から9節、ルカ伝8章4節から8節、共観福音書がみなこれを伝えているところの譬話です。なおずつとマタイ伝もルカ伝も同じく続いて、マルコ伝と並行しております。どの福音書にもそのように出ているので、非常に大事なものであるというわけです。

キリストの譬話は、「ユウリキア」と学者が言っているけれども、ドイツ語でいうと「グライヒニス」です。「グライヒ」というのは、「等しい」という意味で、「それと同じようなもの」というわけです。その「グライヒニス」というようなものと、それから、「パラレール」。これが本来の譬話です。もう一つは、「バイシュピール、エアツィールング」という。「バイシュピール」というのは「例話」です。大体、この三つの種類にわけているようです。「グライヒニス」といわれる、ちよつとした^{たとえ}譬——たとえば、「塩」というものをもつてきたり、あるいは、「灯台」というものをもつてきたり——そういった普通の日常の、ごく卑近な事物をもつてきて、真理をたとえて言う。

「お前たちは^{ともしび}灯火のようなものだ」

というような言い方が、この「グライヒニス」なんです。それから、「譬話」と本格的に言われるのは、一番有名なのはルカ伝15章の「放蕩息子」みたいなもの。自由自在にそこに創作しまして、宗教的な真理をそこに盛るといったのが、この「譬話」です。それから、「例話」式なものは、具体的にそういうことが大いにあり得る、また、在ったというような、或る一つの事実を土台にして作りだしたようなもの。その一番いい例は、「良きサマリヤ人」の話。あのようなのは、単なる空想的な作られたものとはちよつと違うわけです。

そういったわけで、その本来の「譬話」と、そういった「例話」的なものを数えますと、大体33か34くらいになるようです。それから、ちよつとした「譬」を入れれば、50を越えるくらい、キリストは語っておられるようです。

今日のは、本来の譬話です。しかも、^{ぐうわ}寓話的な要素も多少入っているかと思いますが。「寓話」というと、イソップの物語のようなものが寓話です。



●見るけれども認めず

1 イエスはまたも、海べで教えはじめられた。おびただしい群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわったまま、海上におられ、群衆はみな海に沿って陸地にいた。

非常に大勢の者が来たらしい。だから、キリストは困ってしまつて、水の上に舟で出て、そこから語るといふ姿です。

2 イエスは譬で多くの事を教えられたが、その教の中で彼らにこう言われた、

3 「聞きなさい、種まきが種をまきに出て行つた。4 まいているうちに、道ばたに落ちた種があつた。すると、鳥がきて食べてしまった。5 ほかの種は土の薄い石地に落ちた。そこは土が深くないので、すぐ芽を出したが、6 日が上ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7 ほかの種はいばらの中に落ちた。すると、いばらが伸びて、ふさいでしまったので、実を結ばなかつた。8 ほかの種は良い地に落ちた。そしてはえて、育つて、ますます実を結び、三十倍、六十倍、百倍にもなつた。9 そして言われた、「聞く耳のある者は聞くがよい」。

実に明瞭で、非常にやさしいですね。誰が聞いても、分かりやすいお話です。

10 イエスがひとりになられた時、そばにいた者たちが、十二弟子と共に、これらの譬について尋ねた。11 そこでイエスは言われた、「あなたがたには神の国の奥義が授けられているが、ほかの者たちには、すべてが譬で語られる。12 それは『彼らは見るには見るが、認めず、聞くには聞くが、悟らず、悔い改めてゆるされることがない』ためである」。

ずいぶん、妙な言い方ですね。

13 また彼らに言われた、「あなたがたはこの譬がわからないのか。それでは、どうしてすべての譬がわかるだろうか。

そして、その説明をされたことになっています。これはイザヤ書の言葉を引いて、

「見るけれども認めず、聞くけれども聞けず、悟ろうとするけれども悟らず、かえつて悔い改めてゆるされることがない」ためである。

と。「悔い改めてゆるされることがない」というのは、

「悔い改めればゆるされるという、そういう事態がない」

ということです。これはイザヤ書の言葉であつて、それほど、あの当時のイスラエルの民も頑なであつた。「悔い改めてゆるされるため」なんだけれども事実はその反対になると、非常に皮肉な反語的な言い方をして、民をイザヤは責めたわけです。キリストも、この場合、そういったご連中が多いから、このイザヤの非常に反語的な言葉をもつて言われた。

また、譬話で言わないと、すぐキリストを捕まえて、キリストの伝道を妨げる悪いやつ



も混じっていますから、そういう面もあったわけです。ごく信頼しているご連中には、直々（じかじか）の真理を語られた。イザヤも、特に選ばれた群に対しては、直々に神の言を伝えたというようなことがイザヤ書のどこかに書いてあります。

●劇的な事態

福音の真理というものは、一般の人がこれを聞くと躓きになるという場合もある。キリストの言葉の中にも、生（なま）のそういう言葉が相当ありますから、我々が信仰以前に読んだら、「どうして、こんなことを言うんだらうか」と躓きになるような言葉も非常にあるわけです。

「火を投ぜんため来た。平和ではなくて、分争を起こしに来た」

とか、乱暴なことをイエスはおっしゃるものですから、躓くわけです。

けれども、それは例えば、それを受けとると、始めは引つ掻き回すようだけれども、実はそれが本当に素晴らしい液体となっていくようなものです。なにか薬品を溶いて、これをグルグルかき回す。そのうちに、それが浄化されて、素晴らしいものになるといった化学変化を起こす。化学変化を起こすためには、そこに一つの普段とは違った現象が起きるということです。

聖霊の事態も、聖霊が臨んでくるときは、次元が違うものが入ってきますから、そこでぶつ倒れたり、或る時は異言が生じたり、いろんなことになるということもある。それが一つの醗酵状態なんだ。醗酵状態を、それでただ手放しておいてはいけないので、それを本当に内住させるためには、深い祈りと、また、御言をしつかりつかまえることを日常生活において実践していくということが大事なわけです。

そうして来たらば、いわゆる

「福音が分かった」

なんていうのとは質が違ってくるわけです。そういった本ものを与えるためには、どうしても、そこに或る一つの、混乱状態式なものがそこにまき起こってくる。しかし、それは混乱を来たらせるための混乱ではないので、本当のしっかりと結びつき、本当の団結とか、本当の統一とか、本当の調和が来るための、過渡的な現象であり、霊的化学変化であるというわけです。

それを譬話をもって少し和らげて、含めて語っている。そして、その奥は限りないということを知らしめるということに譬話の味があるわけでしょうけれども。そういう、一面カモフラージュしたような面が譬話にはあるわけです。実は真理をあからさまに言うよりも、逆に、譬話は深みをもっているという二つの面をもっている。

普通の論理をもって真理を言ったり、哲学的に語ってみたりするよりも、譬話をもって語る方が――実は本当の真理、人間の生きた現実に対するまことの真理というものは、む



しろそういった具体的な事柄、事物を通して語られた方が――真理は深い。真理の一番深い表現は、文学的な作品、例えばドラマ、劇というようなものが、最高の表現になっているのもその意味です。プラトンの哲学にしても、『対話編』でひとつの劇的な展開をしている。単なる叙述、説明とは違う。我々の日常生活というものは、多かれ少なかれみな劇的な性格をもっているものです。そして、劇的な事態を通して、みんな鍛え上げられて、また深く形成されていく。そういう意味において、やはり譬話というものは、真理の表現としては素晴らしいものだという結論になるわけです。

●運命劇と性格劇

実は、キリストがこうやって説明してしまうと、面白くないのですけれども。まあ、その説明まで読んでしましましょう。

14種まきは御言をまくのである。15道ばたに御言がまかれたとは、こういう人たちのことである。すなわち、御言を聞くと、すぐにサタンがきて、彼らの中にまかれた御言を奪って行くのである。16同じように、石地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くと、すぐに喜んで受けるが、17自分の中に根がないので、しばらく続くだけである。そののち、御言のために困難や迫害が起こってくると、すぐつまずいてしまう。18また、いばらの中にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くが、19世の心づかいと、富の惑わしと、その他いろいろな欲とが入ってきて、御言をふさぐので、実を結ばなくなる。20また、良い地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞いて受けいれ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶのである」。

この譬話は人間の、我々の生活のあらゆる事態を全部含んでいます。我々の生活、心の生活のどんな場合もみんなこの中に入っている。それだけ素晴らしい。「蒔かれた種」と私は題しましたが、路傍に蒔かれたり、石地に蒔かれたり、茨の中に蒔かれたり、良い地に蒔かれたり、という四通りの例がここに載っているわけです。ちよつと運命論的です。人間の生い立ちを考えてみましても、いろいろな血筋、環境、伝統、そういったところに我々はみんな育ってきた。みんな生い立ちは違うわけです。一人ひとりみな違う。

例えば、ゲーテみたいな人は、正に良き地に蒔かれた種みたいな人間ですよ。環境はいいし、彼自身が非常に天才的な才能はいたっているし、すべて順境である。その友だちのシラーというのはそれと正反対です。シラーみたいのは正に石地に蒔かれたような人間でしたけれども、とにかく、あれだけ「ゲーテ、シラー」といわれるような大文豪になったわけです。

「私はこういうように生まれついたのだから、仕方がないじゃないか」という面が、また、



「いくら勉強したって、あいつにはかなわない」

というような、才能の上でのハンデキャップがちゃんとついているわけですね。だから、我々の一人びとりの存在は、非常に外的にいろんな意味において条件付けられて限定されている。限定された存在です。運命的に限定されている。運命劇でもあるし、また性格劇でもある。性格的に非常に理性的な人、あるいは感情的な人、あるいは意志的な人というように、みんな誰でも知情意は持っています。けれども、どれかの面が特に優れているというように、いろいろあるわけです。どうも自分で自分が始末がつかなくなってみたり、あるいは、

「こういう行為的なものを持っているのだが、それがなかなか現れなかったり」というようなこともあるだろうし、

「意志が強いものだから、善意はあるのだけれども、とかく人とぶつかってしまう」

とか。みんなそれぞれ、長所が短所となり、短所が、ある意味において長所となる、というようなわけです。そういった、種々雑多な要素が、性格的な要素と運命的な要素とが絡み合っていて、人間というものはとても分析しきれるものではありません。

「人生は割り切れざるものなり」

と、ヘーゲルか誰かが言ったそうですが、そういったような複雑怪奇なもので一面あるわけです。

●相対的な場

キリストが言われたところを見ますと、種が道端に落ちた。道端に落ちたから、すぐ鳥が見つけて、これをついばんで食べてしまった。

「私は道端に蒔かれた種だから、しょうがない」

と言って、運命論になってしまふ。^{あきら}諦めの哲学になる。性格のうえで、また環境のうえで、生い立ちのうえで、諦めの哲学というものも、或る消極的な意味においては成り立つわけだ。何でも事態を正直に認めていくのがいい。我々は、確かにそういった運命的なものがありますよね。そうすると、キリストの譬話というのは何を意味するのか。

他の種は今度は、石地に蒔かれたら、土が深くないから、生えるけれども、陽が照つてくると、要するに根が深くないから枯れてしまふ。薄志弱行の性格の人は、ちょっとこれの方ですね。私なんかもこれの方で、どれも悪いのがみんな入っています。他の種は茨の中に落ちた。すると、いろんな外側からの誘惑だとか、自分の欲だとか、いろんなものが絡んできて、茨の蔓にからまれるように、それが伸びない。

ところが、良き地に落ちた種がある。「良き地」なんて言ったって、どこが良いか。どうも自分を見てみると、良いなんて思えない。キリストは「良き地」という、非常に幸運な、幸運児だけを褒めているのだろうかと、一応それは思いますよ、これを読んでいるとね。「運命の寵児」^{ちやうじ}なんていう言葉がある。ゲートルなんていう人は運命の寵児です。「良き地に」と



いうのは、それは幸運児なんだ。この譬話をスラツと外側から読めば、確かにそういう面もあるわけです。

「あまりこれは面白くない譬話だな」

と思わないでもないわけですね。ところが、

「聞く耳ある者は聞くべし」

という。

「どうも、それでは、私は浮かぶ瀬もありませんよ」

と言いたいところですよ、ある意味では。

ところが、もう少し深く考えてみると、誰でも自分が本当に幸運児なんてことがない。たとえあつたとしても、ゲーテ自身が、みんなにうらやましがられる幸運児だったけれども、

「自分は一生のうち、本当に幸福であると感じたことは四週間とない」

と告白している。『エッカーマンとの対話』の中に書いてある。いつも何か重荷を背負って、坂の上へ転ばし上げているようなものである。努力精進して来たんだと言う。エジソンみたいな天才も、

「自分は、発明の天才と人は言うかもしれないけれども、そうではない。90何%かは努力であつた」

というようなことを彼も言ってます。

要するに、人間の性格だとか、運命だとか、そんなものはみんな相対的な場でありまして、五十歩百歩というんです。どんなに或る点が優れているが、どんなに或る点が欠点であろうが、そういうことがその人を決定はしない。我々の人生を本当に決定するものは、やはり別なものである。それは路傍であらうと、石地であらうと、茨の中であらうと、個によつてそのような蒔かれ方を、ある意味においては、されたということが言えます。けれどもまた、別な角度から見ると、我々は或るときは石地にあり、或るときは路傍にあり、或るときは茨の中にある。我々の生活においてその三つの場合が、三つの譬をもつて――この三つは素晴らしい譬です――言われているところのものがある。

●突き破って進んでいく

「路傍」は悪しき偶然性とも言いいますかね。それから、「石地」は、根がおりていないのだから、根つこを深くする、鍛錬を要求するところの事態がこの「石地」である。患難です。それから、「茨」の方は、患難に対してこつちは欲心の方です。外側からくる誘惑だとか、内側からくる欲だとか。誘惑と欲です。「石地」の方は患難です。根つこをおろすべきひとつの反対が、辛さをもつて根つこを強くする。たとえば、あの樅の樹――ハイネの『ハルツライゼ』の中に出てくるような、ドイツのああいふ所は相当、岩石がある――岩石の石地に落ちた樅の種は、岩を乗り越え岩を穿^{うが}つて、根をグングン張っていく。岩を穿つたり、



岩の間に根を深くおろす。即ち、石地に蒔かれた種が、そのままだったらダメだけれども、それが頑張っていくと、根を深くおろして、石地の上に亭々として聳える喬木ができる。また、茨というやつを、いろいろな欲だとか誘惑をなお突き破って進んでいくこともありうるわけです。

キリストは、そういったことをここでは語っていらっしやいませんけれども。我々は、この聖書を読むときに、なにも聖書のキリストの解釈そのものに囚われる必要はない。キリストはこの場合こういうようにおっしゃったが、キリストのその譬話の素材を更に私たちは御霊に導かれて、いくらでもそれを掴まえることができる。

だから、石地に落ちようが、根を張ることができる。人間は弱いものだから、

「我々を試みに合わせたもうな」

と主の祈りにはありますが、それは確かに大事なことですけれども。しかし、試みには合うんだ。また、欲心もある。事実、欲心もあるし、誘惑もある。しかし、そいつに負けずに、そいつを突き破って、抵抗して進んで行くという、これもやらなくてはいいかん。

それから、路傍に蒔かれて鳥についばまれる。このところでキリストは、

15 道ばたに御言がまかれたとは、こういう人たちのことである。すなわち、

御言を聞くと、すぐにサタンがきて、彼らの中にまかれた御言を、奪って行

くのである。

サタンというやつがサツと来て、一番あぶない。それも、

「サタンよ、退け！」

というわけで、この鳥を撃退することもできるわけです。そういったサタンへの撃退だとか、患難になお打ち勝っていく、欲望や誘惑になお抗して進んでいくということを、私たちはこの運命的な角度の譬話に対してこれを掴まえようとするわけです。キリストはもちろんただ運命と言ってらっしゃるわけではないですけれども、

「そういうことがあるからよく人間は負けてしまうものだが、しかし、良き地に蒔

かれれば」

と言って、キリストは、

「欲も誘惑もなく、患難もなく、サタンもない、そういう世界に居れ」

なんておっしゃっているわけではない。譬話というものは、そう完璧に言えないですから。この譬話は、いろいろの角度から掴まえますから、我々は今、そういう角度からこれを掴まえようとするわけです。

●御言を受け入れる

それでは、「良き地」というのは、そんな非常に順境な地に蒔かれたということかと思ったらば、ちよつとそこところが、キリストの言葉は注目を要する。



20 また、良い地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞いて受けいれ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶのである。」

「良き地に」というのに、

「御言を聞いて受けいれ」

という。ちよつと、ここのところだけ、言い方がおかしいんです。「良き地」というのは客観的なものでしょ。それなのに、キリストの解釈は、「御言を聞いて受けいれ」というんだから、何かちよつと、解釈の仕方がここでもって、標準が変わってしまっている。変わったとも見えるし、またもうひとつ、キリストの言葉の奥を別な角度から見ると、「石地」というのは要するに、患難に負けるような心、そういった石地だという。それから、「茨地」というのはやはり、心の世界で誘惑や欲望に負けるようなことである。そういった心の面からも、キリストはそれを含んでおられたとも思われるわけです。

今度は、「良き地」は即ち、

「御言を受け入れる」

ということが「良き地」だと言う。この「御言を受け入れる」という、この「受けとる」ということが問題の中心になる。路傍や石地や茨と違って、「御言が受けとれる」という地は――「地」は「ち」と読んでもいいし、「じ」と読んでもいい――自分の心がそういった地になっている。御言を受けとることが十分できるところの心、それは本当に細かく砕けていなくては。この地が本当に砕けていなければ。砕けの心です。砕かれたところの地になつていなくては、何かここに我^があつたり、欲があつたりしているのでは、本当に御言を受けとることができないわけです。

私たちは庭に草木を植えるでしょ。その時に、地面を先ず柔らかく砕くでしょうが。そして、そこに少し肥料を入れたりして、種や苗木がよく育つように、その所をならすわけです。それが「良き地」というわけですから、そういった肥料とか、あるいは土がよく砕けているところ。そういうような地にするときに初めてそれが生えてくる。そういうような心、そういった砕けというものは、私たちはある程度はできますけれども、それがどうしても手放しではうまくいかない。

●十字架の砕けと天来の肥料

この「砕け」、本当に良き地という、私たちがこのキリストの言葉をその角度から受けとるとするならば、砕けの土壌というものは、キリストに砕かれなければ、本当の砕けにはならない。キリストに砕かれるということは即ち、キリストの十字架によって砕かれる。キリストの十字架の砕け――「砕けの神学」なんて前に言いましたが――この十字架の砕けによつて砕かれる。

私たちはどんな環境であろうとも、どんな運命であろうとも、どんな性格であろうとも、



どんな才能であろうとも、そういった相対的な元来持ち合わせているようなものは結局、本当の「良き地」にはならない。どんな長所も、それが決して本当に祝福とはなっていない。

パウロが非常に意志の強い男で、意志の強いという長所をもっていた。そついが逆に働いていたから、キリストを信ずる者を迫害していたではないですか。あのパウロの強い石ころみたいな意志だ。正に石的な意志だ、そのパウロの岩——岩はまた癌に通ずる——癌みたいな心です。ところが、十字架で粉々に砕かれてしまつて、パウロは砕けの土にされている。そして、その砕けの土に、これ以上砕けることのない砕けの中に入ってくるものが、キリストの聖霊です。人間的な謙遜なんてものはまだ大したことではない。十字架のキリストによつて本当に降参して、もう参つてしまつています。

「私はもうダメです」

と。完全に砕ける。「ダメです」というのは絶望という意味の「ダメ」ではないですよ。自己については絶望です。けれども、自己について絶望した人は今度は、キリストにおいて本当の有望になる。それは、砕かれてしまいましたから、そこに天来の肥料が入ってくる。聖霊です。天来の肥料は、油は、滋養物は、種を育てていくものは、これは聖霊である。砕かれたる土に養分を与えて、そして、種がスクスクと伸びていく、その養分は聖霊です。これが御霊のバプテスマです。

「十字架と御霊は離すことができない事態である」

と申し上げているとおりです。「良き地」というのは、御言を受けて——「受けとる」ということはなぜ受けとれるか。十字架によつて砕かれた地に御言、即ち霊言が受けとられるのですから——霊にして言なるものが、聖霊にしてまた聖言なるものが入ってくる。

「わが言は霊なり生命なり」

と。「言が霊である」とキリストはちゃんと言っているんだ。

「わが言は霊である。霊であり生である。霊生である。わが言は霊生である」

と言う。霊の生命であるキリストの言葉は観念ではない。教えではない。霊の生命であるところのキリストの言葉は、聖書を読んでいて、これをただ言葉だと思ったらダメですよ。

さつき司会者が、

『我によらずは何ごともしあたわず』という言葉は、直ちに霊言として臨んできた」

と言つた。それは、受けとるということ。その霊生が、霊にして生命なるものが、そこに十字架の砕けによつて入ってくる。受けとる。英語の訳に「ウェルカム」なんていう言葉に訳してある。それを迎え受ける。喜んで迎え受ける。砕かれたところには、喜んで聖霊が臨んでくる。

こないだの集会で、K君がもの凄くぶつ倒れてしまった。しばらく起き上がれない。あ



のようにしてだんだん突破していくんです、人間というものはみな。そして、深く御言が
いよいよ根づいてきたら、芽を出し葉が生じて花が咲く。

●一切の秘訣を得たり

路傍であろうと、茨の中であろうと、石地であろうと、

「一切の秘訣を得たり」

とパウロが言ったのはそのことです。私たちは、この譬話を決して単なる運命的な言葉として
は受けとらない。実際、我々の人生にはこの三つの要素がいくらでもやって来るんだ
から。「これでいい」なんていうところはありはしない。死に至るまで我々をいろいろ揺り
動かします。私なんかも、転んだり躓いたりというようなわけです。けれども、それでも
なお、私は絶対に望みを失わない。それは、聖霊がいらっしゃって来ているから、それで
勝っていく。特に、「地水火風」を語りだしてから、私も自分の人生において、信仰生活に
おいてひとつの躍進を始めているわけだ。今度の集会も、あのように神さまが一同を恵ん
でくださったのは、そういう心境に私は来ているからなんです。それは正直、申し上げます。
なるほど、私は人生の後半において、神さまはとうとう私を凄くお使いになる。また、
お捕まえだしになったということを本当に感謝しているわけです。どうか、旧き小池^{ふる}なん
ていうやつは、どしどし忘れていただきたい。私は現在と未来に向かつていよいよ進んで
いく。我々は、お互いさまですよ。お互いさま本当に、もともと本当の意味の団
結というものはこの御霊の一致でもって生じて、輝かしく、夏の輝かしさよりも更に輝か
しい光がやってくるわけです。

そうなってみると、譬話そのものに決して囚われずに、我々はキリストがここで解釈な
さった以上のものを、ここで御霊の導きによつて受けとることができる。どれであろうと、
それに対処していくことのできるのは、私ではない。キリストです。

「我によらずは何ごとにも勝ち得ない。しかし、我によれば、一切に勝つ」

ということですよ。

「我によらずは何ごとをも為し能^なわ^{あた}ず」

というのは、

「我に居れば、我によれば、何ごとをも為し能う」

という、プラスに響いてくるわけです。私たちはこの人生をそのようにして積極的に、

「キリストに在つて一切を為し能う」

ということに進んでいく。もう相対的なものではない。人間は万能ではないけれども、そ
の人を通して――今まで自分で自分を限定していたような、そんなつまらない限定をやめ
て――天下一品のものが、あなた方一人ひとりの中に形成されていく。絶対にそうです。
それは御霊でなかったら、絶対にそれは行かないんだから。これはもうはつきりしている。



使、徒、的、信、仰、を、な、ぜ、私、た、ち、が、死、守、し、ま、た、こ、れ、の、た、め、に、は、い、か、な、る、事、態、に、対、し、て、も、闘、つ、て、行、け、る、と、い、う、の、は、こ、の、聖、霊、で、す。聖書が、預言者たちが、使徒たちが証している世界は正にこれです。

それで、なるほど、私たちはキリストの十字架とその御霊によつて、良き地とされ、良き種とされる。どこに蒔かれようがそこを、石地を砕いて良き地にしてしまい、茨の中をなお良き地にして、進んで行くことができる。そこに一切を、良き地、良き種とされるところの事態がある。それは御言を、れいげん霊言を受けとるという事態にかかつてくるわけです。霊言を受けとったところには天下無敵である。もはや、環境や運命ではない。そんな諦めではない。何でもござれと。もの凄い積極的な世界です。

● 去此不遠

一休和尚の歌に、

「色相はその時々に変わるとも不生不滅のころ変わらじ」

とある。まあ、これは禅の世界ですから、「不生不滅」というようなことを言う。色相はその時々に変わつても、不生不滅の心は変わらない。現象面においては色々なことがありましても、本体面におきましては不滅である。だから、現象面が主観的なものであろうと客観的なものであろうと、色々変わつても、本当の心をもっていれば、不生不滅の心があれば、それに処していくことができるということです。これはみんな似たような心境をもっている。

「阿弥陀仏さすれば即ち去此不遠、まよへばはるか西にこそあれ」

此処を去ること遠からずという。

「天国は、道は近きにあり」

とパウロも言っているとおおり、

「聖国は近きにあり」

という。

「阿弥陀仏悟ればすなわち去此不遠」

此処を去ること遠からず、いや自分の中にあるということですね。

「迷えばはるか西にこそあれ」

阿弥陀仏、極楽は、「迷えばはるか」西方浄土なんて言うけれども、西方浄土ではない。本当は、

「浄土は自分の中にある」

という、禅宗的な悟りの世界です。まあ、どれだつて、結局そうなんですけれどもね。

環境運命、自分の性格、そんな色相が色々あろうけれども、その奥に不動のものを持つ。不変のものを持つ。それが即ち、本当に自分自身が良き地、良き種となる。蒔かれた運命



的な種が実は、運命も性格も全部支配してしまうところの、そういった種に生まれ変わるわけです。

一休のいろんな歌を読んでも、結局、帰するところはみんなそうです。

「釈迦もまた阿弥陀ももとは人ぞかし、我もかたちは人にあらずや」という。

「本来、神の似姿ではないか」

ということだ、我々の言葉で言えば。本来神の似姿で、この神の似姿を本当に――悟りの世界で禅宗はつかまえるけれども――我々は本来神の似姿を恩寵の世界で無条件に受けとる。悟りよりもつと易行道です。また、もつと積極的な力強いものです。

●神相

そうなりましたならば、非常に気が楽になる。また、人を羨むことも妬むことも何もうなくなってしまう。何を羨んだり妬んだりするかという。我がうちに、キリストは、掛け替えのないものをそれぞれ皆さんの中に形成している。そして、その人の中に形成されていくところの、それぞれの麗し^{うるわ}さがある。みんな決して一様ではない。いろいろなその人の特色というものが、究極の意味において、神的なものにされてくる。その神的なものをお互いにその中に見ていく。いろいろな色彩、形態がその人において、神的な相をもつて、神相をもつて現れてくるわけだ。神相をもつて皆さんの中に、一人ひとりの中に現れてくるものをお互に見ることができる。

それは聖霊の光で見ることが出来る。人の欠点を見るのではない。その人において現象しつつあるところの神相を見ていく。これが本当の和をもたらし、本当の調和をもたらし、大和ならしめ、団結ならしめ、キリストの体ならしめるところのものです。そういった祝福されたものの見方が出てくるわけです。何と楽しいことだ。私は本当にこの頃、そういう意味でうれしくてしょうがない。ありがたいですね。そして、そういった心境の世界が一番豊かであり、また一番強いんです。

どうか、我々のこの福音というものが何ともいえない素晴らしいものであるか、ということ大いに自覚して、これを何としても伝えていかななくては。身をもつて伝える。私は明日から、明治学院大学の宗教部の学生たちに語りますが、彼らが何とかしてこの世界を受けとってもらいたい。

「私たちは教会主義に基づいていますが、その点をお含みください」

なんて言ってきたけれども、何に基づいたって、そんなことはない。本当の意味において、私だって教会ですよ。キリストのエクレシアとしてある。まあ、どういうことになりましか、とにかく、私は水を割らずに本当のことを言つて、

「我、火を投ぜんために来たり」



というキリストの使徒らしく、僕らしく語っていききたい。まあ、若い人たちですからね、なるだけ躓かせないように、キリストのように譬話で言えば一番いいのだけれども。どういうことになるかは知りません。

そういうようなことで、皆さんも、

「もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから^{のろ}むられてキリストに棄てらるるも亦^{また}ねがう所なり」（ロマ9:3）

なんて言っている、あのパウロの悲願霊願というものは、何とパウロという人はキリストの聖霊の真理と生命に満たされていることか。

「たとえキリストに棄てられても、私はこの福音を伝えないではいられない」

と言っているではないですか。パウロは何とキリストに燃えている存在となったか。それが聖霊の世界でなくて、単に

「真理が分かった」

とか、そんなことでもってパウロなんていう者はつかめるものではない。パウロの言葉なんていうものは、もう噴出して火を発しているような言葉です。いわんや、福音書におけるキリストの言葉というものはもっと烈しい。その次元に私たちはいよいよつっこんで行く。そうしたらば、本当に自由自在に、私たちの中にこの神相が現象していく。そのようにして行きたい。また、そのことを本当に感謝し、ありがたく、限りなき望みをもって進んで行こうというわけです。おしまい。

